

連載小説

また遅くない

〔6〕切り崩し

葉月一郎

え・小西保文



この女は、なにを企んでいるのだろうか――。

動揺をみすかされまい、と心に鑑を着ながら、戸波は亜紀子の横顔をさぐった。

一瞬、その透明なほど白い頬に、微笑が走って消えた。

嘲笑、と戸波は受けとめる。だが、突差に切り返すことばが見当らない。それが、もどかしい。

その耳に、亜紀子の声が届く。

「たのしみにしてますわ、キャンペーン。きつと、効果的な記事が載るでしょうね」

乾いた、無感動な口調である。

怒りに似た感情が、噴き上げてきた。

「君は、それをいうために、僕を呼んだのか」

「そうじゃありません。本当に、お友達になりましたかったですのよ」

あらずじ 昭和四十五年秋――。毎朝新聞神戸支局の戸波峻記者は、地元大手企業兵庫製鉄の公営キャンペーンに加わるよう石津支局長に命じられた。新聞のむなしさを知り仕事に意欲を失っていた戸波は、これを断ってバーの女ユカとの情事に溺れてゆく。たまたま、兵庫製鉄の下請会社につとめる堂本敏夫の無罪判決の記事を書くが、このために堂本の前歴がバレ、会社は堂本を解雇する。復讐の連鎖に行つた戸波は、かつて酔っ払いにからまれて救つてやった兵庫製鉄秘書課の細川亜紀子と再会する。ある朝、戸波はユカの洗濯ものに一面に付着する黒い斑点に気付く。それは兵庫製鉄の降下ばいじんだった――。

ユカが無意識のうちに鼻先へ突きつけてくれた被害の告発状。突然戸波はこの仕事に意欲が湧た。翌日亜紀子と花隈へ販みに行った時、この秘かに発足したキャンペーンのことを知っていると。何ということだ。敵の手こわさをいきなり思い知らされた。

またも、微笑が走った。

挑発的な笑みに見えた。

社長に会見を申し込んでいるから「毎朝新聞が何か動き出した」ことぐらいは当然わかるだろう。

しかし、七人の侍などという、特別取材班につけられたニックネームは、ごく内輪の話で出ただけなのに。

戸波の中の平衡感覚が、崩れて揺れた。

運ばれたウイスキーを、一気に飲み干す。

「じゃ、今夜は、すべてを忘れて、徹底的に飲むとするか。われわれの友情のために……」

「ま、うれしい、といいたところだけど、私、今夜は門限十時。弟が郷里から出て来てますの」

「弟？ ハゲかヒゲか、中年の弟なんてのは、もう古いよ」

いらだちが、戸波を襲った。

(どっちも強敵やな)

態勢の建て直しを意識の底で考える。

店の入口で、ざわめきがした。客を迎える女将の、はなやいだ声が弾む。

「お、細川君。珍しいな」

底抜けに陽気な声がして、中年の男が亜紀子に近づいてきた。

「ま、部長さん。えらいところを見つかったわ」

亜紀子が、思わず腰を浮かす。

「や、これは失礼。お連れが、いらっしゃるのか」

「いえ、いいんです」

肥満児が、そのまま年をくったような感じの男である。おそろしく度の強い眼鏡が、その福々しい丸顔に乗っかっている……。

「部長」と呼ばれたその男は、戸波に会釈して、小腰をかがめた。

「どうも、失敬しました」

「あ、部長、ご紹介しますわ。こちら、毎朝新聞の戸波記者さん」

「お、毎朝さん、これはどうも」

男は、ポケットから名刺を抜き出すと、いんぎんに差し出した。

「いつも、お世話になってます。どうぞ、よろしくお願いします」

《兵庫製鉄本社総務部長 花房圭之助》

一周り大きい名刺には、これまた一段と太い活字がアラをかいて……。

「戸波です」

軽く頭を下げる。下げながら、心の奥底に戦慄が走るのを意識する。

(ワナだ。これは、仕組まれたワナに違いない)

亜紀子と総務部長は、偶然に出会ったわけではあるまい。はじめから、こうしてつながりを持つように筋書きができていたに違いない――。

花房部長は「委細かまわず」といった様子で亜紀子の向う側に腰をおろすと、ビールを受取って、スツと突き出してきた。

「いかがです。いっぱい」

「いや、私は、ウイスキーをやってますから……」

突き放すような口調で、はっきり拒否の姿勢をとる。

(スキをみせては、なるまい)

頬を硬くして、戸波は軽く唇をかんだ。

「戸波さん、どうです。ここでは何だから、奥の座敷の方で、ひとつ、いかがですか。お近づきのしるしに……」

「いや、結構です。私は、ここで失礼します」

「まあ、そう固いことおっしゃらずに……」

「カウンターのほうが、好きです」

「そうですか」

いくらか未練を残した調子でいうと、花房部長は急に影のある笑みを浮かべた。

「おたくの支局長だって、私どもと食事をしておられるんですよ。まあ、気軽に、お付き合い願いたいものですな」

支局長が――その一言が刺さった。……そんな筈がない。

戸迷いをかくして、とがめる視線を返した。度の強い眼鏡が、それをさえぎった。

「いやあ、これは気がつかなかった。どこかクラブの、女の子のいるところへご案内しましょう。その方が、いい。細川君、君も一緒にどうかね」

ヌメヌメした粘つこい口調を、ふるい落とすように立上る。

「失礼します」

一万円札を女将に押し渡す。

「また来る。つりは、そのとき……」

急ぎ足で、出る。

どこか潮の香をはらんだ夜風が、逆立つように足元から吹き上げてきた。秋の深まりを告げるような細い風である。

酒や金で、新聞記者を誘惑する。方法としては、古くて新しい。ヘタなようで、いまでも最も効果的かもしれぬ。誘われた経験が、ないわけではない。

だが、不思議に、怒りの感情はわかなかった。

（敵は、つまり兵庫製鉄は、まず正攻法でワナをかけたきた。しかも、手の内には、かなりの情報をつかんでいる。次は、どんな手を打ってくるか）

「七人の侍」の一人ずつを、ゆさぶろうというのか。

支局長や、キャブテン格の戸波を、集中攻撃するつもりなのか。

（支局長は、一緒に食事しますよ）

顔に似た、肉太の声が鼓膜に残っている。

花隈本通りへ出て、タクシーを捜した。三人連れの酔客がゆらゆら揺れながら通りすぎた。

「お送りしますわ」

湿った声と、くすぐるような香水のにおいが寄り添ってきた。細川亜紀子の、月あかりを受けた白い頬が、すぐ背後にあった。

「せっかく来ていただいたのに、すみませんでした」

長い髪が、また揺れている。

不意に、凶暴ななにかが、戸波の血を騒がせた。

（この女を、粉々にしたい。すっ裸にして、思いきりもてあそんでやりたい……）

カマトトめ、——低く、つぶやく。

これが、大会社の秘書嬢か。威厳に満ちた重役たちに

取囲まれて、優雅に、誇り高く振舞っている白い蝶——。

「え？ なにか……」

「僕が送ろう。いや、もう少し、飲みに行こう。ヘンな中年男抜きで、ね」

「ま」

まるで予期していたように、つかまれた腕をほどこうともせず、亜紀子は口元をゆがめた。ダダッ子をあやすのに似た眼で、唇だけが微かに笑っている。

「ああいうタイプ、おきらいでしょう」

「しめし合わせて、総務部長があとで出てくるなんて、底がみえてるぞ」

それには答えず、亜紀子は言葉が続けた。

「あれで、やり手なんですよ。社内じゃ、切れもので通っています」

「やり手の切れものなら、君もそうやな」

はぐらかすような微笑を残して、亜紀子はタクシーを止めた。

兵庫製鉄の役員会議室は、基幹産業の「大奥」にしては意外なほど質素である。

壁に掛かった歴代社長の肖像写真をじろつと眺めると和久井社長は一段と声を高くした。

「どうしても、そのインタビューに出席しろというんかね」

もともと地声の大きい男である。それが、怒ったような表情で声を張り上げると、文字通り割れ鐘のような響きがした。

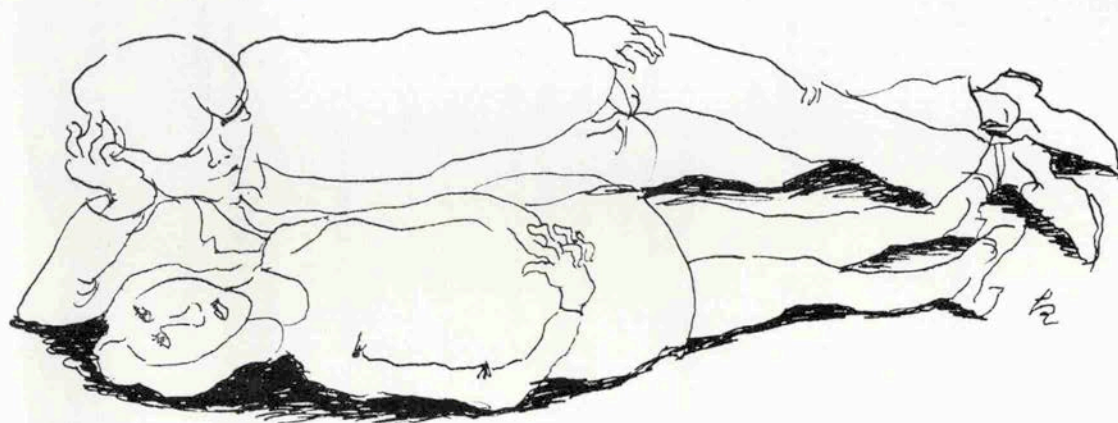
しかし、総務部長の花房は、語調を変えようとしなかった。

「はあ、何といっても毎朝新聞は、影響力があります。

ヘタに拒絶した結果、逆恨みの記事をボンボン書かれると、あとで工場周辺の住民対策が何倍も困難になります。

それよりは、一応こっちの言い分をしゃべって頂いた方

が……」
 「しかしなあ」
 和久井は、左足の靴を脱ぐと、グイと椅子の上へ上げた。



「新聞なんてもんは、飽きつぽいんだよ。公害キャンペーンも、君、せいぜい半年か一年で消えてしまおうさ。先月の日経連の会議でも、大方の意見は、そうだったな」「でしよな」

大北専務が、大きく合槌を打った。

「新聞が、ごじゃごじゃ書いている間だけ、われわれはじつと首をすくめとりゃいい。塹壕戦ちゅうわけですよ」

「私は、そうは思えないのです」

一歩もひかぬ構えで、花房部長は度の強い眼鏡を光らせた。

「データがあります。第一に、この工場周辺の住民の中に、根強い民商組織がある。まだ、ごく一部ですが、連中が自治会の役員を占めるところも出てきた。このグループが、新聞と結託すると、ことは面倒になります」

もう秋も深まりかけているというのに、汗かきの花房はしきりに首筋のあたりをハンカチでぬぐった。

「つまりですね、この際、むしろ、新聞を利用して、こちらから住民に先制攻撃をかける。わが社がいかに社会に貢献しているか。しかも公害防止にはこんなに大金を注ぎこんでいるんだ。そういう実態を積極的にPRした方が、むしろ逃げるよりもプラスじゃないか、と思いませんか」

フム——という表情で和久井は身を乗り出した。この野人型の経営者は、「攻撃」という言葉に食指を動かされたらしかった。

「新聞は、なるほど浮気っぽい。すぐ飽きてしまふ。情報は、いつも使い捨てである。たしかに、その通りです。しかし、今度のようなテーマだと、住民つまり読者は自分の生活にかかわりが大きいから、逆に新聞に食いついてゆく。」

住民と新聞が二人三脚になる可能性は、かなり強い。そうなると、これは半年や一年で終わらなくなりそうですよ」花房は、自分の発言の効果を確かめるように、同席している役員の表情へゆっくりと視線を流した。

そこまで一気に説明すると、細川亜紀子は急に口をつぐんだ。

浜辺の砂を洗う波の音が、にわかに高鳴って耳に届いた。星が、ひとつ流れた。

この須磨海岸まで、亜紀子はタクシーでまっすぐに戸波を誘ってきたのである。とっくに水泳シーズンが終って、浜には無気味な沈黙が立ちこめていた。タクシーを降りると、まるで先客が待っているところへ案内するような亜紀子の足どりだった。

波打際に近い砂山に腰をおろして、二人はしばらく海をみつめた。

（この女の仮面を、はいでやろう）

そんな想いで、戸波は黙って亜紀子に従ってきたのだ。その期待にこたえたのか、はぐらかしたのか、亜紀子の口について出たのは、きょう昼間の、兵庫製鉄における役員会の内容だった。

とまどい、真意を疑い、そして次第にひきこまれ、戸波は聞き耳を立てていた。

（そうだろう。支局員自身さえ、この企画に最初は驚いたのだ。相手の兵庫製鉄が対応策に頭を悩ませたのも当然だろうな）

おそらく、その場に居合わせたのだろう、亜紀子の話には臨場感があった。生々しかった。

月あかりをうけて、白い頬はいっそう深さを増している。花隈で感じたあの狂暴な気持が、いつの間にか戸波の中から消えているのに戸波自身は気付いていない……しばらく波の旋律だけが二人を支配した。

まるで脈搏のように、それは規則正しく流れてきた。

「それで、結論は、どうなったの」

先に口を開いたのは戸波であった。

亜紀子は、チラと戸波を眺めると、黙ってそのまま砂の上へ背を倒した。ハンドバッグを枕がわりにして、垂直に夜空をみつめた。

「総務部長の意見が通ったようです。ただし、条件つきで……」

「条件——？」

「そう」

どこか投げやりだった亜紀子の語調が、急に硬くなってきた。表情も、蠟細工の能面に似た硬さである。

片肘をついて上体を倒すと、戸波は亜紀子と並ぶかたちになった。

亜紀子は、身じろぎもせず、上空の一点に眼を据えている。

形のよい脚が、砂浜に伸びていた。仰向いたまま両腕を胸の上に置いて、無防備な姿勢とも見えた。えんじ色のベルベットのワンピースがかなりずり上がって、肉付きのいい太ももの大部分が月あかりにさらされている。しかし、その挑発的ともとれるポーズにも戸波の心は動かなかった。

兵庫製鉄の首脳部は、毎朝新聞の挑戦を受けて立つ、という。逆に、先制攻撃の構えで臨むことも予想される。

ふと、武者ぶるいに似た戦慄が、背筋をよぎった。

「条件って、どんな内容なんかな」

もう一度、さりげなく切り出す。

亜紀子は、すぐ真上へ近づいた戸波の顔に、針のような視線を当てた。

「新聞社の切り崩しをすること。神戸支局はもちろん、本社の広告部、経済部……あらゆるところへ手を回して、このキャンペーンをやめるよう働きかける。その工作を、平行してやるのが条件です」

（つづく）

曲線ハイウェイ

武田 繁 太 郎
え・横 塚 繁



しばらくごぶさたしていた東名高速であった。環八から、東京I.Cに愛車に乗っていると、多木は、たちまち水にかえった魚のように、いきいきした気分になってく

る。

MVはスピードをあげた。厚木までの三車線、MVは、いつものように、先行車をこぼろ抜きに抜いていっ

〔あらすじ〕 東名高速サービスエリアで多木洋介は神戸の女性宇津康子と知合い、逢瀬を重ねるうちに康子にひかれていった。ある日友人岡本和彦と共に神戸へきた多木は康子に会えず、彼女の面影に似た辰野英子を紹介され、六甲山へドライブに出かけた。ロマンティックな情景に誘われて英子を抱きしめた多木の胸に、初めて感じるいとおしさがつり、その夜二人は愛しあって別れた。

そんな時突如として康子から電話があり、多木と康子は二人の愛を確かめあった。翌朝、風のように去っていった康子を追い神戸にきた宮の多木は、岡本の早呑み込めと神戸の雲間気の中で英子を探している自分に気付いた。英子をもつた多木は淡路島へのドライブに出かけたが、その帰りに中年の男と寄りそって歩いている康子を目撃した。その衝撃を負って帰京した多木のもとに康子からの屈託のない電話が入った。十日間の休暇をえた多木は、北海道へのドライブに康子と出かけ、札幌から海岸沿いの国道を通り、さいはての村島牧に向った。その村は、難病にかかった象の花子が温泉で闘病していることで、かつて新聞に報道されたことがあった。

島牧についた二人は、花子を見舞い花子の世話をしているS氏と親しくなった。S氏を招いて夕食を共にし、動物談話から愛と性へと話は発展した。二泊して二人は帰京した。帰京した多木に英子から電話があり、東京へ遊びにいくという。OKした多木は、新幹線東京駅まで出迎え、二人は若者の街、ジョウジの夜を楽しんだ。その夜、多木と英子は久しぶりにたがいの愛と性を燃やした。

三日後、英子は帰京した。コロボに帰った多木は東京を離れる決心をし部屋を整理した。その時康子から電話があり、東名高速の浜名湖サービスエリアで逢う約束をした。

た。もう身も心も軽い、愛車までかかると宙をとんでいようであった。

厚木から、丹沢、足柄を越えて、御殿場にでると、富士が待っていた。いつもよりくつきりと、その雄大な山容をおしげもなく、多木にみせてくれた。

多木は、わけもなくうれしくなった。こうして美しい富士に迎えられる自分が、いま、とてつもなく幸福なさなかにいるように思えてならなかった。

富士に見送られながら、MVは、富士IC、静岡ICなどをいつ気にとばし、浜名湖上のS字型の橋をわたると、もう浜名湖SAの駐車場にすべりこんでいた。

約束の午後三時より、二、三十分もはやく着いてしまった。宇津康子は、いま、どの辺を走っているか。名古屋か、豊橋あたりか。多木は、SAのテラスに腰をおろして、康子の到着を待った。

コーヒを喫しながら、三時になったが、康子はあらわれなかった。三時半になっても、まだ姿をみせない。どうしたのか。以前から、時間には几帳面な女だったはずである。

四時になった。だが、まだだった。約束の時間に一時間もおくれるなど、いままでにないことだった。なにかあったのか。

さらに小半時間、多木は、カラになったコーヒー茶碗をまえにして、ひとりテラスの椅子にすわっていた。ま

ちがいなく、なにかがあったのだ。
事故にでもあったのか。神戸から三百キロちかくも、ハイウェイを突っ走ってくるのである。途中事故にあわないという保証はない。だが、そういう不吉な予想を、多木は、自分で追っ払っていた。一時間や一時間半の遅れで、すぐ事故にむすびつけるのは、少々神経質すぎるというものである。

とすれば、出発まぎわになって、なにか急用でもできて、出発がおくれたのか、あるいは、出発できなくなってしまったのか。これは、ありうることである。

だが、もしそうだったとしても、康子のほうからは連絡のしようもない。むろん、多木のほうからも、事情を問いわせるすべはなかった。彼は、彼女の住いも電話番号も教えられていなかったのである。

くるのか、こないのか、見当もつかぬまま、多木は、手をこまぬいて待つよりほかはなかった。しだいに、彼は、いらだててきた。

つくねんとテラスの椅子にすわったまま、ようやくたそがれの気配のただよいだした浜名湖の湖面をみおろしながら、ふと、多木の脳裏に、神戸の夜の街で、あの後ろ姿を垣間みた中年の外人の男のことが浮びあがった。康子がいまだに姿をあらわさないのは、もしかしたらこの男に原因があるのではないか。多木には、そんな気がしてきた。仔細はない。それは、いわば彼のカンのようなものであった。

だが、多木は、自分のカンには自信があった。康子があらわれないのは、あの外人に原因があるのしか思えなくなった。康子があの外人に黙ってでかけようとした間きわに、あの外人があらわれて、彼女は、でるにでられなくなった。そうにちがいない。

多木は、大きく吐息した。いらだてていた多木の胸は、微妙にゆらいでいた。

といって、彼には、どうする手だてもなかった。身動きがとれないのである。約束の三時から、そろそろ二時間ちかくになっていた。康子は、くるのがおくられているのではない。このぶんでは、もうやってこないとみなすべきだろう。

だが、女においてきほりを食ったからといって、多木は、いまさら東京へひきかえす気にはなれなかった。彼はもう東京を捨ててきているのである。

それにしても、康子が約束を破るような女だったとは、多木は、いままでいとも疑ったことはなかった。こんどだって、彼女のほうから、デイトの誘いをかけてきたのである。多木は、土壇場になって、この女から裏

切られたような気がした。

しかし、いつまでテラスの椅子に腰をおちつけていても仕方がない。独りで、これからどこへいこうか。もうあきらめきった顔で、椅子からたちあがった多木のまえに、小走りで康子があらわれたのは、五時をだいぶすぎたころであった。

「ごめんなさい。こんなに待たせてしまって」

康子は胸をはずませて言った。彼女自身も息せききってかけつけてきたといった感じであった。

「もうしびれを切りして、ここにいらっしやらないかと思っただわ」

「そうだな。あと十分おそかったら、たしかに、もうここにはいなかったな」

多木は、康子があらわれたことが、いまではふしぎで

ならぬような面持ちで言った。だが、さすがに彼は、ほっとした気持ちになっていた。

「でかけようとしたら、きゅうに來客があつて、氣になりながら、つい話しこんでしまったのよ。女つて、話しますと、長話になるでしょう。わるい癖ね」

やはり、多木の予想したとおりだった。だが、たずねてきたのは、女客ではあるまい。あの外人にちがいない。彼はまだ自分のカンを信じていた。

しかし、いまはまだ黙つていようと、多木は思った。いずれはふれねばならぬことである。女のほうで言ひのがれがでないような雰囲気で、彼は、問いただすつもりであった。そのチャンスを、彼は、自分のほうからつくりだすつもりであった。

「喉、かわいたろう？ コーラでも飲む？」

「ええ」

多木は、テラスから店内にはいって、二人ぶんのコーラを自分でさげてきた。

「今夜の予定は？」

かわいた喉をうるおしながら、康子は、やっとひとごちつたようにたずねた。

「そうだな」

多木は、腕の時計をみながら言った。

「もうあまりとおくへもいけないな」

五時半をすぎていた。

「ちかいところで、館山寺へでもいいこうか」

「いいわ。あなたとはじめて逢つて、泊つたところね」

「うむ」

思い出が、多木の記憶に、虹の橋を架けた。思い出の虹は、七彩の鮮烈な光芒を放っているが、それでいて、あくまでもおほろで、むなしいまほろしの橋であった。

それはちょうど、この女との愛の歴史を、そのまま物語っているようであった。

「いこうか」

二人は、テラスをでた。二台のMVは、浜名湖SAを



☆新しい関西を創造する総合雑誌

オール関西

<3月号・創刊8周年記念号予告>

☆グラビア「女の四季」池坊保子

“ 「万葉記」 ⑫犬養 孝

“ 「And His Ladies」

大野正雄

“ 「私の散歩道」 宮崎辰雄他

☆連載対談／梅棹忠夫 山崎正和

☆アラブ大使の声③／アルジェリア

☆現代と伝統③／吉田光邦

☆わが社を考える／ダイキン・山田稔
他

☆対談／元町れんが道完成

「道を考える」

水谷顕介 野口武彦

☆今月の視点／林屋辰三郎

☆「織田作之助伝」②⑤／大谷晃一

☆「大阪物語」⑦／石濱恒夫

☆「夕ぐれに苺を植えて」⑥足立巻一

☆戯曲「東山」／伊藤邦輔

月刊 オール関西編集部

大阪市北区梅ヶ枝80 梅新東ビル7階

TEL 06-364-2434〜7 (代)

でると、浜名湖の北岸の道をまわって、三十分たらずで、館山寺についた。

シーズンオフのせいとか、館山寺はひっそりと夕闇のなかに沈んでいた。宿も、このまえ泊ったおなじホテルをとることができた。

二人は、ひと気のない三階の部屋におかれた。

「あら。この部屋も、まえとおなじじゃない？」

康子は、室内のたたずまいをながめながら言った。

「そうだったかな。そういえば、そうかも知れない」

多木の記憶はあいまいだった。だが、まえとおなじ部屋だったとすれば、これも、なにかの因縁というものである。多木には、いい思い出になった。

ボーイが去ると、康子は、自分から多木の胸に面をうずめてきた。男の背に両の腕をからませ、男の身体にすがりついてくるような感じであった。こうして康子のほうから積極的に男の愛撫をもとめてくることも、この女にしてはめずらしいことだった。

多木は、康子の身体をうけとめ、唇を重ねながらも、康子のこの烈しさは、やはり、あの外人のせいにちがいないと、また思われだしてきた。あの外人とのあいだに、なにかがあったのか。それがなにかは、まだわから

ぬ。だが、多木は、自分のカンがもうまちがいないものと確信が持てた。

温泉につかり、夕食をすませ、地階のバーで食後の酒を喫して、三階の部屋に引揚げてきたのは、まだ十時まえであった。いつもの二人なら、これから夜の遊びのはじまる時刻である。

「もうやすみましようか」

「うむ」

二人は、早々にベッドにはいった。

二人は、すぐ抱きあった。なにかに追われるように、二人は、たがいの身体をまさぐりあった。

だが、ベッドのなかでも、やはり、康子のほうが積極的だった。すぐ、彼女の身体は燃えあがった。その燃え方は、もの狂わしいほど烈しかった。紅蓮の愛の炎で、われとわが身を灼きつくそうとしているようであった。こんな康子も、むろん、はじめてだった。

だが、多木も、その熱狂の愛によく応えていった。今生の愛の名残りを、いますべて果しつくしてしまうかのように、多木の若い肉体もまた、康子に劣らず、灼熱の炎をあげていた。

(つづく)

(灘区 谷本昌平)

(仙台市 とく・ひかる)

★我こそはまことの神戸っ子、生まれてからの神戸の土着民です。そして、現在の神戸をなげきます。これわしとしまつた町の様子はしかたがないとしても、残った自然を大切にしたいといけないのだ。くだらない散歩などはやめて下さい。

(北区 馬場番)

(北区 黒崎番)

小小鴨	柏嘉嘉	金小	岡牛	榎石	石乾	砂青	朝比	安部
泉林磯	居井納	納井野	小曾根	崎尾並	野野	野	木	比奈
德芳良	健毅	正元一	真吉	正成	信豐	重	正	
一夫平	玲六	治彦	造忠	朗明	明彦	仁雄	隆夫	

竹津玉田田瀧瀧竹角砂塩新白雀阪坂古後上小
馬高井中宮川川中南田路谷川部本井林藤林林
準和健虎勝清猛重義秀昌之時喜末英秀
之助一操一郎彦二一郁夫民孝雄渥之介勝忠楽二一雄

神行元百村光宮宮松福深畑野南難中中西西直外
戸吉永崎上田地崎井富水沢部波西卷脇村木島
青年
会
議
所
女
正
雄
郎
治
二
雄
男
美
吉
郎
郎
三
還
勝
弘
親
公
郎
吉
太
健
郎

A simple line drawing of a bird, possibly a penguin or a similar large bird, standing and holding a flower in its beak. The bird is facing left, and the flower is a simple four-petaled flower on a stem. The drawing is minimalist, using only black outlines on a white background.

〈小泉 康夫〉

★近い人がなくなつて尊となった。消えていった。だけれど神戸っ子は残つて行く。聡しナ。このくらも一生懸命ガバラナくては、べ小泉美喜子

★一月の寒い日、長田区の寝たきりの老夫婦の家を訪れた。「どっちが先に逝つてまうかわかれへん」とすき間風の吹く部屋で淡々と語る老人

人口統計學

神戸っ子ごあんない



★月刊神戸っ子を毎月お読みになりたい皆さま、また神戸を離れているお友達に、神戸の香りをおとどけになりたい方は、編集室あてにお申込み下さい。さっそくお送りします。

6 力月分 一二〇〇円

1 年分 二四〇〇円（送料共）

★月刊神戸っ子に紹介されている神戸

戸の銘店には、お客さまへのサービ

スとして神戸っ子がおかれています

★月千神戶で子をお買求めの時には

左の本屋さんへと戻す。

ニウ・フ・ツクス
ニユ・フ・ツクス
京
町
所

二口
二口
二口

京川
商古
街角

漢口
漢陽
漢川
漢江

文 漢
羊 費
堂 房
新聞會館 1 號

丸 大 館 東 日

1
3
1
3
2
1[illegible]

頒価
200
円

156

神戸のうまいもん&ドリンクキング

★日本料理

- 阿なご寿司 青 辰
神戸市生田区元町通3-184
TEL 331-3435
- 讃岐名代うどん あこや亭
神戸市生田区旗塚通7-5 TEL 231-6300
トアロード店 TEL 391-2538
兵庫駅前店 TEL 575-5306
- 和食くれな い
三宮生田新道浜側中央
KCBビル2F TEL 331-0494
- かつばう 花くま
神戸市生田区花隈町45
TEL 341-0240
- 鍋もの・おむすび 悟味西
あ茶漬・がぼた 神戸市生田区北長狭通1の20 TEL 331-3848
三宮さんちかタウン TEL 391-5319
- お茶漬・おむすび 里
鍋もの 神戸市生田区北長狭通2の1
TEL 331-5535
- たこ焼 たちばな
三宮センター街(旧柳筋) TEL 331-0572
- 北海道郷土料理 蝦夷
神戸市生田区中山手通1丁目115
生田区東門路東門会館ビル1階
TEL 331-7770
- 季節料理 婆婆羅(ばさら)
神戸市生田区北長狭通1丁目18
三宮阪急西口北側レインボーラザ1・2F
TEL 321-6363

★西洋料理

- レストラン アポロン
ティーバーラー 神戸市生田区八幡通5丁目6
TEL 251-3231
- レストラン 鹿鹿 皮<あらかわ>
神戸市生田区中山手2-9
TEL 221-8547・231-3315
- GALLERY & STEAK HOUSE SAN-MON 三門
神戸市生田区中山手通2丁目98ノ99
TEL 331-5817
- ステーキハウス れんが亭
神戸市生田区下山手通2丁目34
TEL 331-7168
- レストラン セントジョージ
神戸市生田区北野町1丁目130
TEL 242-1234

- レストラン 男爵
神戸市生田区中山手1-18
山手第一ビル1F TEL 241-0778
- maison de la mode 花屋敷
三宮プラザウーロード市役所前
TEL 251-2109
- 鉄板グリル きゃんどる
神戸市生田区北長狭通2-22
TEL 331-1183
- レストラン キングスアームス
神戸市生田区磯辺通4-61
TEL 221-3774
- 居酒屋 風 井戸のある家
れすたらん 生田新道新世紀南
TEL 331-5664
- レストラン ムーンライト
三宮・生田新道
TEL 331-9554
- 串かつ店 和蘭陀屋
三宮相互タクシー北入
TEL 321-0230
- グリル・鉄板焼 月
神戸市生田区北長狭通1-24
生田神社前 TEL 331-2509
- BARBECUE & STEAK 六段
生田区元町通3丁目
TEL 331-2108
- イタリア料理 ドンナロイヤ
神戸市生田区明石町32
明海ビル地階 TEL 331-7158
- レストラン ハイウェイ
神戸市生田区下山手2-20
TEL 331-7622
- ピッツアハウス ピノッキオ
神戸市生田区中山手2-101
TEL 331-3545
- レストラン フック東店
神戸市生田区栄町1-5-3
TEL 321-3207
- ピザ&スパゲティ ガルの店
三宮区琴緒町5丁目1-7
西山ビル1F TEL 241-9025
- レストラン ミリオナークラブ
生田区山本通2丁目50の2
レストラン 231-9393~5
メンバーズ 221-1162

フレームコのお店 エル・ヴェイノ
神戸市生田区北野町3丁目48 アニルドマンション1F
TEL 241-1344

- フイーク ウェスタン ローストシティ
神戸市生田区三宮町3丁目22
TEL 331-3770
- RESTAURANT & BAR ゴックスタッド
生田区山本通3丁目18 回教寺院前
TEL 242-0131
- メキシコ小料理 ティファーナ
神戸市生田区中山手通1丁目4ノ12 パールコーポラスビル1F
TEL 242-0043
- ドイツ風音楽レストラン コーベ・ローレイ
生田区北長狭通6丁目39
TEL 371-0003

★喫茶

- 宮本のにしむら珈琲店
中山手店 神戸市生田区中山手通1丁目70
TEL 221-1872・231-9524
センター街店 神戸市生田区三宮町2丁目35
TEL 391-0669
- modern Jazz & Coffee さりげなく
生田区北長狭2-22 TEL 331-9762
- 喫茶・レストラン バロン
神戸三宮サンパザ地下 TEL 391-1758
トアロード店 TEL 391-1210
- 喫茶 ガーディニア
神戸市生田区東門113-1 大神ビル1F
TEL 321-5114
- 珈琲 モーツアルト
神戸市生田区山本通2丁目98 グランドマンション1F
TEL 241-3961

★club

- くらぶ 阿以子
神戸市生田区中山手2丁目89
TEL 331-6069
- club 飛鳥
神戸市生田区中山手1丁目117
TEL 331-7627
- エドワーズ倶楽部
神戸市生田区北長狭通1丁目128
ホワイトローズビル5・6F 生田新道 TEL 391-3300
- club 小万
神戸市生田区東門路中島ビル3F
TEL 391-0638・4386

c i u b さ ち
神戸市生田区中山手通2丁目75
TEL 331-7120

- クラブ 千
神戸市生田区下山手通り2丁目21
TEL 391-1077
- 洋酒肆 仏蘭西屋
三宮生田新道相互タクシー北入
TEL 321-0230
- c i u b なぎさ
神戸市生田区北長狭通2の1 TEL 331-8626
- c i u b 路<ふき>
神戸市生田区下山手通2丁目 TEL 391-1515
- くらぶ ぶーげん
三宮生田新道浜側中央KCBビル5F
TEL 331-8593
- c i u b Moon Light
BAR TEL 331-0886・391-2696
Club TEL 331-0157
- クラブ るらん
神戸市生田区北長狭通1丁目53 TEL 331-2854

★STAND & SNACK

- スタンド 英屋
生田区下山手通2-6 相互タクシー横
TEL 331-1100・331-6600
- スタンド グラムール
生田新道ビル地階 TEL 331-4637
- SNACK MATSUMOTO
神戸市生田区中山手通1丁目32 TEL 3
曾根ビル1F TEL 241-5470
- カクテルラウンジ サヴォイ
高梁山側 テキの店北
TEL 331-2615
- スタンド さりげなく
生田区下山手通2丁目31
生田新道高地西入 TEL 331-3714
- 洋酒ハウス 雑貨屋
神戸市生田区下山手通2丁目
PHONE 078-321-0860
- スナック ビジービー
神戸市生田区中山手2丁目
TEL 391-4582
- 居酒屋 ボルドー
生田新道浜側中央KCBビル1F
TEL 331-3575

スナック シーザー
生田神社西門伊藤ビル地下
TEL 331-1429

- 洋酒の店 キャンテイ
神戸市生田区北長狭通2丁目3
TEL 391-3060・391-3010
- スープとパン店 キャンテイ北店
神戸市生田区下山手通3丁目8-9 TEL 331-3661
- DRINK SNACK スネカジリッ子
神戸市生田区下山手通2丁目
水見ビルB1 TEL 391-8708
- Stand&Snack サントノーレ
ティー&ドリンク 生田区下山手通2丁目トア・ロード
TEL 391-3822
- Salon de roulette サントノーレ
パシードラ ルーレット教室 神戸市生田区中山手通1丁目24-7
ダイワナイトプラザ6F TEL 391-3822
- 素舌洞 でっさん
神戸市生田区北長狭通1丁目源平寿司3階
TEL 331-6778
- STAND アトラス
生田区中山手通1丁目95
TEL 331-5433
- スナック GASTRO
神戸市生田区中山手通3-20
トアマンション TEL 231-0723
- スタンド クラブ・ガーデニア
神戸市生田区中山手通1丁目115
東門路中島ビル2F TEL 391-3329
- SNACK 山の手
神戸市生田区中山手通1丁目
ソネビル1F TEL 221-3637
- スナック 比奈古多
どうぶ料理 神戸市生田区北野町1丁目143
Tel 241-1306
- ザ ロン アルバトロス
生田区中山手通り1丁目24の7
大和ナイトプラザ1F-B TEL (231) 3300
- スナック エルソタノ
神戸市生田区下山手通 TEL 331-6620
- スナック 山荘
神戸市生田区北長狭通1丁目22
TEL 391-5823
- スナック 紋
神戸市生田区北長狭通1丁目41-1 レンガ筋
TEL 331-8858

★KOBÉ PLAY GUIDE MAP★

神戸のうまいもん＆ドリンキング



ROBERT BROWN

スコッチの血筋をひく高級ウイスキー
ROBERT BROWN
Dハート ブラウン / 760ml・2300円
キリンシーグラム株式会社



の開幕。新発売
キ、キあ芳醇な物語

物語の作者は「キリンシーグラム株式会社」。
キリンと、世界屈指の洋酒メーカーとして有名な
シーグラム、そしてスコッチの名門・シーバス
ブラザース、この三社の提携による合弁会社です。
物語の主人公は「シーバスブラザース秘蔵の
スコッチ原酒をたつぷりと使った高級ウイスキー」。
物語の読者は「あなたです。そつと口に含むと

ロートブラウン物語

あるウイスキーの生誕

Kobe Beef つる牛亭 Tsuruushitei



2F

すき焼	1,800円
しゃぶしゃぶ	2,000円
肉さし	1,500円
石焼き	3,500円
特級酒 300円	ビール大 300円

つる牛亭牧場 兵庫県出石郡出石町宮内
電話 (079649) 6847番

肌も姿もすぐれた上に味もよいぞえ但馬牛

蔓牛ツルウシの由来／但馬地方は兵庫県北部にあり牛の産地として千五百年以前より自然の環境に恵まれて育れ、「神戸牛」「松坂牛」「近江牛」の元祖牛となる但馬牛を生み、この日本一の基礎牛は優れた肉質形質を強力に遺伝する優良系牛のことで別名「蔓牛」と呼ばれ、世界一の牛肉の味を誇っています。

通に贈る神戸ビーフの元祖牛「但馬牛」産地直送の

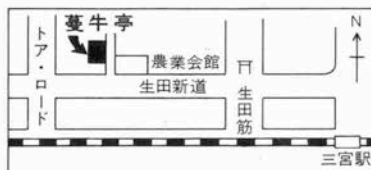


ステーキ・すき焼・しゃぶしゃぶ



蔓牛亭
つるうしでい

神戸市生田区下山手通り2丁目29(農業会館西入る)
Tel 078 (331) 8891・7957 神仙閣となり



1 F 12:00PM ~ 1:00AM
2 F 12:00PM ~ 10:00PM

1F

ステーキ

ヘレW 4,500円
S 3,500円
ローズW 4,500円
S 3,000円
スープ 400円
J & B 300円
(ボトル) 6,000円



●日本の風土がかもしだす四季おりおりの旬の味覚を存分に
それも最高の雰囲気でお召し上りいただく季節料理の店が
誕生しました。



カニ料理「ばさら」



婆娑羅

電話(078)321-6363

阪急三宮西口北側レインボープラザ1・2F



ホテルのすま 直営店



婆娑羅定食………700円
お好みにより季節の旬の焼魚
お刺身・茶わん蒸しなどを追
加いただければ、一層の季節
感が味わえます。

民世風の落ち着いた大小の
お座敷と、お気軽な
テーブルの御食事処



ビール又は日本酒
お1人様1本サービス
◎鍋物4名さま以上に

うどんすき	¥ 600
寄せ鍋	¥ 800
すき焼	¥ 1,000
しゃぶしゃぶ	¥ 1,000
かにちり	¥ 1,200
魚ちり	¥ 1,200

●ランチタイム…定食二割引

※御宴会は80名様迄・ご家族様の小部屋もございます。

民世風 お食事処
鍋物・会席

楽 珍

阪急三宮西口北レインホープラザ3F
三宮阪急西口 ☎321-5200(代表)



DRINK & SWACK
スネカジリ

生田区下山手通 2 丁目30
永晃ビル地階
☎ 391-8708



DRINKING IS AN ART OF LIFE 生田区中山手通 1 丁目32
WOODHOUSE 山内ビル
☎ 241-7320

KOBE DRINKING GUIDE

wine room
SAKA

生田区中山手通 2 丁目93
東洋ビル 2 階
☎ 391-2323



restaurant
ダリア

三宮ビル南館地下 1 階
(そごう別館)
☎ 251-7808



★陽射しも段々と春めいてきたようです。北風に縮みあがっていた町も人も、やわらかな光に包まれ、活気づいてきました。“スネカジリッチ”も春を迎え、ますます、賑やかになってきたようです。いつも若い連中がいっぱいの“スネカジリッチ”には若者を引きつけて離さない魅力があるようです。その秘密は、イキな店造りとそれがかもし出すステキな雰囲気にあるのはもちろん、何よりも陽気な店のメンバーにあるのです。春は新しい仲間のできるとき。新しい仲間ができれば、まず、“スネカジリッチ”へ。初対面であろうとなかろうと、すぐに和気あいあいとなってしまうのです。“スネカジリッチ”とはそういう店なのです。

☆水割G&G ¥300 ビール(小) ¥250 おつまみ ¥100 ビッツァ ¥350 ミニチュアビン(W) ¥500

5:30P.M.~1:00A.M. 第1・第3月曜日休み



スネカジリッチ

★寒い寒い冬もようやく終りを告げ、神戸の街も春のおとづれの弥生3月。皆様いかがおすごしですか……。なんとなく心ウキウキの季節になりますと、“ウッドハウス”の店内もホンワカムードのカップルの姿がアチコチで……。なかには、「流れ者には女はいらね〜」とキザっている一人者がさみしく飲んでる姿……。とにかく春はいいですね〜。ところで、昼の部「目玉商品」ランチがすごく好評でして、早くお知らせしなくてはと思っていましたが、ついついおそくなり……かんにんなのグライスにやさしいサラダ、それに一品物にスープ付で250円(安〜いです)11時30分から1時30分頃まで。早く行かないと品切れまちがいなし。一度行ってみてください。

☆昼(11:30A.M.~7:00P.M.) コーヒー ¥150 紅茶 ¥150 ビラフ ¥250 サービスランチ ¥250 夜(7:00P.M.~4:30A.M.) ビール(小) ¥250

水割り(OLD) ¥350 フィズ ¥400 おつまみ ¥100 平日11:30A.M.~4:30A.M. 日曜 5:00P.M.~0:00A.M. 第1・3日曜日休み

ウッドハウス



KOBE DRINKING GUIDE

SAKA

ダリア



★北風も遠のき、どうやら春めいてきました。重いコートにさよならをする季節です。こんなときワインルーム“サカ”のスペースはあなたに充実した春の一宵を約束します。マスターの坂谷さんは、にがみ走った顔にオリエンタルホテル時代のスマートさがピタッと決っている。しかし、ただ飲むだけでは面白くない。そんなときには、ギターの先生に声をかけてみよう。見かけによらずゆかいな人で、ギターの腕前はいわずもがな。いい気分が歌えます。そして、“サカ”の魅力は店の女性のフレッシュさに尽きるのです。春宵一刻価千金。飲んで、歌って、笑って“サカ”で過ごす夜は千金にも万金にも値すること受け合いです。ボックス席もあるのでグループで楽しくやっても最高ですよ。

☆水割り(オールド) ¥450 ビール ¥400 ボトル(オールド) ¥6,500
ボトル(リザーブ) ¥7,500 つき出し(各種) ¥300 鍋物類(各種) ¥500
6:00P.M.~2:00A.M.

★春の味はレストラン“ダリア”から。このたび、“ダリア”に絶対の自信をもつてみなさまにおすすめできるメニューが登場いたしました。それは、コンビネーションブラ。お好みの品が二皿セットされたランチメニューです。4種類あり、手頃なお値段で楽しんでもいただけます。おかげさまで好評をばしておりますが、まだご存知ない方にもぜひおすすめしたいと思います。ご注文のときには、“コンビ”とお呼び下さい。きっと、お気に召すものと思います。

☆ダリアスペシャルステーキ ¥800 サローインステーキ ¥1,800
牛へレ最上のステーキ ¥2,000 牛へレ肉の煮込みストロガノフ風 ¥800
ビーフシチュ ¥800 クンシチュ ¥800

11:00A.M.~9:00P.M. (ディナータイム 5:00P.M.~)
木曜日休み

